



私にとってのピアノ

林 光 公開講座より

(昭和51年度夏期研修会より収録)

昭和51年度夏期研修会での林 光先生の講演をまとめたものです。先生は現代日本を代表する作曲家として、非常にユニークな存在で、この度現代の子供にマッチした、とても楽しい曲集「ピアノの本」を出版される等、教育方向でも幅広く活躍しておられます。

きょうは、ぼくが今までピアノとどう暮してきたか、という事についてお話したいと思います。

一口で言うと、ピアノが大好きであるということしかありませんが、ぼくは満3歳ぐらいからピアノをさらってきた訳です。ピアニストの園田高弘さんのお父さんがお始めになった、音楽基礎教育の実験グループに入ったというより、自分の意志ではなく、親の意志であった訳ですが……。

そこはどのような所かという、ピアノの総合教育だけではなく、他の楽器（ヴァイオリン等）を使った、総合教室であった訳です。その頃のぼくは、ピアノを弾くのは大変好きだったけれど、ピアノをさらうのは嫌いだった（笑い）。昭和15、6年頃でしたから、他の子供達は日曜で、みんな真黒になって遊んでいるのに、自分はカバンを持って出かけるのです。冬は寒いし、雨が降ったりすると長靴の中で靴下がとんとん脱げたりして……。先生のレッスン室は星なお暗い感じの部屋で、二台のピアノがでんとあって、申し訳程度に火鉢に火が入っている。しかし外から暖めても手は動かない。そんな指でよくさらっていない曲を弾くから、うまく弾ける訳がないんです。

一方、自分の弾きたい時に、弾きたい曲を弾くのは、大変好きだった。その時に与えられた曲を、自分の弾きたい様に弾く……という事が、今、考えるととても大事で、レッスンの時に組み込まれていたらよかったし、もっとピアノを勉強出来たのではないか、という気がしないでもありません。

ピアノが好きになって……

このようにして、ピアノを弾いてきた訳ですが、ピアノを好きになっていくプロセスの中で、いろいろな事があった。ピアノ曲を（もっと詳しく言えば）ピアノ独奏

曲をずっと続けて、段階を経て進んでいたのではなかったという事から逆に、ピアノを好きになるきっかけが含まれていたと思います。たとえば、小学校1、2年の頃、自由学園のグループで、初期ではピアノと並行して、曲が弾ける様になると、ヴァイオリン等でも弾くということがあった。ヴァイオリンで、すごく優しい曲を習い、それをピアノと合わせる。（モーツァルトのソナタを実演）。誰がピアノ伴奏をするかということなのですが、当時体が弱かったりして、ヴァイオリンのレッスンを休みがちだったせいか、ぼくが伴奏に回された事が多かったのです。伴奏の場合、ピアノとヴァイオリンの音色の違いということ、考えなければならぬし、それをどういう風に工夫するか、という事を考える訳です。ヴァイオリンというのは音がのびる楽器であるが、ピアノは消えてしまう。そういう事をぼくなり考えて、弾いたつもりだったのですが、ヴァイオリンの先生に「とてもよかったよ」と言われたのが、ぼくにとってすごくうれしかった。今までと違ったように弾けたのかと思い、それ以来伴奏するということが、好きになったし、工夫するようになったのです。

どうやって合わせる事を工夫したかという、今、考えると、自分の弾いた曲が、どのように鳴っているかを聴いていたと思う。又、自分で聴きながら、試していた自分ひとりで弾いている場合は、聴かなくても弾ける場合が多い。ピアノの曲を弾くという事から、はみ出す事で、いろんな事を勉強しました。それからレコードをたくさん聞くようになったわけです。

たとえば、ベートーヴェンの第5シンフォニーや、ヨハン・シュトラウスの曲（ウィーンの森の物語を弾く）を聞き、聞いて覚え、それを早く弾いてみたくてしょうがなくなり、聞き覚えをピアノで弾いてみるけれど、完

全には弾けない。具体的にはオーケストラの曲だから、音のニュアンスが違うが、ピアノで弾きたいように弾き又、自分で出してくる音を必死になって聴き、自分の意志で自分の欲しい音を出していくようにしたものです。

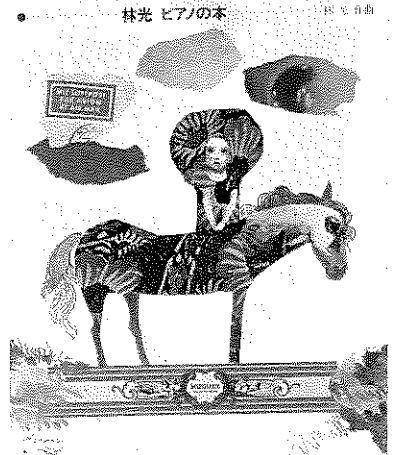
自分が譜に書いた曲を、他人が弾く場合と、本人が弾く場合とでは、ニュアンスが違うでしょう。そういう事をやっていくことが、その時々と与えられるピアノで、面白く弾くことのパネになっているわけです。劇場でサーカスの伴奏をしたり、進駐軍の楽隊をやったり……。その度に違ったピアノで、違った音楽を弾くことによりピアノが弾ける事がどういうことかが、ぼくの中で広がって来たり、ピアノが増々好きになった。ジャズピアノ等も好きになった、ピアノという楽器が好きだし、どんなピアノにもその匂いがあると思う。誰も弾いた様な形跡もないピアノは、可愛想だし、音楽の先生のピアノや、ナイトクラブのピアノは又、違った匂いがありますね。ピアノはきちんと調律されていなくても、その場所に置いてあるだけで、そのピアノの命があり、それを使ってとてもいい音楽をやると言うことが素晴らしいピアノになる訳です。

「ピアニスト」というのは、場所によってどんなピアノがあるか、わからない。どんなひどいピアノでも、そのピアノで聴衆に音楽を楽しんでいただく。そのためには、工夫しなければならぬ。極端な場合は半音下がったピアノもある。そういう場合でも、そのピアノで可能な限り、何とか弾いてきたということは、それまでに、いろいろなことをやってきたことが、役に立ちました。

ピアノみたいに、いろいろな音が出せるものは他にない。ピアノ音楽以外のものを弾くということ、ピアノを弾く人の音楽的な世界が、どんどん広がっていくと信じています。

たとえば、最近ケンズの演奏で、バッハやヘンデルのピアノ以外の作品をピアノで弾いたレコードが出た。とても良い事は、ケンズ編曲と書いてあるが、原曲を5線紙に書いて弾いたのではなく、自分の耳で記憶したものを、そのままピアノで繰り返し弾いていた。そして間違いを直しながら、弾き直して編曲になっていることがとても良い魅力だと思うのです。いろんなものを弾くという事は、自分の音を創っていくことにつながってくるのではないかと思います。

ピアノを弾くという事の中に、聞くという事と創ると言うことがある。弾いていくとピアノはいろんな音が出る。ピアノは上から下まで、均一な音が出ると思うが、それは品質の異なる音が出る訳です。場所によっても違ったり、そのメロディーが何の楽器の音かを連想（イメージ）しながら聞けば、また違う。そういうことを感じていく。感じるだけでなく、出せるようにしていくことが



ピアノという楽器と、一緒に暮していける大切な要素だと思ふ。

オーケストラの中でピアノをよく弾きましたが、ピアノだけでなく、終戦の頃など、ピアノでグロッケンシュピールの代用をしたり、モーツァルトの魔笛の旋律は、チェレスタで普通はやるのですが、それがないからピアノでやる。又、お琴の音を連想しながら春の海を弾く。

(ただ単にピアノの音で弾くのと、お琴の感じを出して弾くのを実演)。この事はお琴の音を真似して弾けるようになるということだけでなく、ピアノを弾いていく上での工夫、そういう音の世界を自分で創っていくことができる訳です。

ぼくはピアノをちゃんとさらっていないので、不十分などころがあるが、テクニックの難しいものを弾ける人が、必ずしも、音楽的な曲や伴奏等にむいているとは限らない。テクニックは必要だが、いろんな音楽的感覚を磨いておかないと、鈍くなってくる。指が回るということは、途中でいろんなものを忘れ去ってしまうという、危険性があるので、その事を補っていく必要がある。そのためには、ピアノ以外の音楽をどんどんやっていくことが、いいと思います。ピアノという楽器が、いろんな事が出来る楽器だから、それをやるということが、面白いのではないかと思います。

このあと、全音刊「林光 ピアノの本」の演奏法 指導法の講義がありました。次回に御紹介したいと思います。